上記以外に，これまでの自分の研究をSRCDなどの場で発表したり，コロキアムで議論する事ができた。また，Rutgers大学（New Jergey）では乳幼児研究をしている若手研究者と出会うことができ，新しく共同研究もスタートすることになっている。このような自分と同世代の研究者との出会いは，高名な研究者に会うのとは違った喜びであった。十カ月の研究期間はあっという間に過ぎてしまったが，ここでの経験は今後の励みにつながるものと信じている。

帰国後の研究経過について。帰国してあっという間に六カ月が経過してしまった。アメリカでやり始めた仕事の多くはまだ継続中であるが，Purdue大学て行った研究の内，ラテラリィに関する物の一部は日本心理学会第50回大会で発表された。また，婦国直後から，Purdue大学で行った分析方法を使って乳児の行動分析を行ったが，この結果の一部は本紀要に報告した。また，発達グループとして従来より続けている“きょうだい関係”に関する共同研究にも再び加わらせてもらっている。現在進行中の研究は，今後数年の間に徐々に結果が明らかになって来るものと思われる。

思えば短い一年ではあったが，密度の濃さは今までのどの年よりも濃いものであった。このような機会を充分活用できるよう援助していただいた教室の皆さんに，この場をかりて感謝の意を表します。

研　究　経　過　報　告

石　田　勢津子

この一年の研究を振り返ってみると，まず，梶田助教授を中心とするPLATT（個人レベルの学習・指導論）に関する共同研究がある。この一連の共同研究は３年目になるが，現在，大学院の学習グループの全員が加わる共同研究のテーマとなっている。大学院の院生の人たちにとっては，時間的な負担は増すであろうが，研究のテーマそのものについての学習はもちろんのこと，共同研究をすることによる副次的な学習もできる機会である。個々人の研究テーマの一つとして取り込むこともできるし，２本柱の一つにすることもできるであろう。

さらに，本年度には附属学校の先生方も加わり，本紀要にも掲載されているマイコンを用いたPLT研究が進められている。この附属学校の研究グループには，私の恩師の方々もおられ，時の流れを感じさせられる研究会である。

このPLATTの研究も，一つの節目を迎えつつある。本年出版された梶田正巳著の「授業を支える学習指導論－PLATT」に，この基本的な概念や構想が示されている。その実証的な研究として，現在いくつかの研究が平行して行われているが，できるだけ早い時期に，論文として発表する予定になっている。それと同時に，現在今後の展開についても検討を進めている。

個人の研究については，本年度は実験を行うことができず，もっぱら今までの実験の結果を整理したり，まとめたりといった活動が主であった。昨年実施した実験結果は，本年度中に掲載の予定である。また，自己評価，セルフコントロールに関する研究をまとめたものも，近々発表されることになっている。